地学雑誌　Journal of Geography（Chigaku Zasshi）　124（6）887–894 2015　doi:10.5026/jgeography.124.887

特集号「富士山をめぐる人文地理学研究 ― 観光を中心に ―」序説

呉 羽 正 昭* 菊 地 俊 夫**
佐 野 充*** 山 本 充****

Preface for the Special Issue: Human Geographical Studies of Mount Fuji Region Focusing on Tourism

Masaaki KUREHA*, Toshio KIKUCHI**,
Mitsuru SANO*** and Mitsuru YAMAMOTO****

I. 富士山をめぐる人文地理学研究

2013 年 6 月，富士山が「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」としてユネスコの世界文化遺産に登録されたことは記憶に新しい。文化遺産を構成する資産は富士山を中心にその周囲にも分布し，その数は 25 件にも及ぶ。本特集号「富士山をめぐる人文地理学研究―観光を中心に―」は，富士山とその山麓を含んだ地域の特徴を人文地理学の研究方法で描き出す新しい観点，さらには多様な側面を有する観光空間の特性を把握する新しい観点の 2 点を模索することを考慮して編集された。

冒頭で説明したような「富士山」群の世界遺産登録は，社会の関心のみならず，研究者の関心を集めている。その一方で富士山は，その登録以前から人びとの注目を浴びてきたことも事実である。たとえば，国土全体でみると，日本は山国であるという特徴は普遍であろう。しかし富士山は，そのなかでもつねに「別格の山」というかたちで位置づけられてきたように思われる。富士山は，日本最高峰であると同時に，裾野の広い形態を呈した独立峰である。こうした物理的条件に基づいて，富士山は日本人の憧れともなり，日本各地に富士を冠した山の名称が付けられた。蝦夷富士，高井富士，讃岐富士などがその例である。また，別格の山という性格もあって，富士山は信仰との関係を深め，富士講の形成や信仰登山の発展をもたらしてきた。

「別格の山」という性格はその位置とも関係している。江戸時代以降，東京が日本の政治の中心となってきたが，東京から眺めることが可能という点で富士山は他の山とは異なる。さらに，江戸時代以降日本の大動脈となってきた，東海道からの富士山の姿も人びとの憧れとなった。移動の手段が，徒歩から，鉄道，高速道路，新幹線へと変わっても，そこからの富士山景観は多くの人びとを感動させてきた。

以上のように，富士山という山の性格は，火山であること，標高が高いこと，山麓が広大であることという点で他の山とは異なる。さらに，富士

* 筑波大学生命環境系
** 首都大学東京都市環境科学研究科
*** 日本大学文理学部
**** 専修大学文学部
* Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan
** Graduate School of Urban Environment Sciences, Tokyo Metropolitan University, Hachioji, 192-0397 Japan
*** College of Humanities and Sciences, Nihon University, Tokyo, 156-8550, Japan
**** School of Letters, Senshu University, Kawasaki, 214-8580, Japan

山と山麓を含む領域内部においても異なった地域的性格を有する。それゆえに，内部的にもさまざまな人間活動がもたらされ，その結果として独特で多様な産業立地，土地利用，景観がもたらされてきたと捉えることができる。

富士山麓の広大な斜面は農業生産の場として利用されてきた。しかし，火山山麓ゆえの乏水性，火山灰土の展開などは，日本の水稲作を基本とする農業経営には困難な条件となった。したがって，富士山麓には多くの戦後開拓地が立地した（浅黄谷, 1972）。また，酪農や養鶏，養豚などの畜産，高原野菜生産，芝の生産（大垣, 2000）のような独特な農業部門が存在している。空間的にみると，南西麓と東麓では標高 600 m 以下の地域で，多種類の土地利用種目構成に特徴づけられる（丸山, 1994）。一方，西麓や北麓では標高 500 ～ 1,000 m の高度帯に畜産経営を中心とする散村が卓越する。

農業生産に恵まれない地域としては，当然ながら農業以外の収入源が求められてきた。その経済手段としては，後述するような観光業があげられるが，工業も重要な手段としての役割を演じてきた。富士山北麓では，大月市までを含む広い領域で小規模な絹織物業が発達してきた（辻本, 1972; 湯澤, 2009）。一方，富士山南麓では近代工業が発達し，高度経済成長期には太平洋ベルトの影響で大規模な工場が立地した（太田, 1972）。

「別格の山」という性格に基づいて，富士山は観光対象としても特別な地位にある。見る対象として，登る対象として，標高の高い場所として富士山やその山麓は人びとの観光行動の目的地になってきた。本特集号では，このような主として観光空間としての富士山の諸相を描き出そうとしている。以下では，観光空間としての富士山の変遷を整理・検討するとともに，特集号の内容を概観することにしたい。

II. 観光空間としての富士山の変遷

1）第二次世界大戦以前

富士山の裾野を含んだ領域において，観光空間としての性格は内部的に大きく異なっている。江戸時代の信仰登山は観光行動とは認識されないという面もあるが，登山の拠点となったのは，宿坊を経営する御師の集落であった。江戸時代には，静岡県側では，大宮，村山（ともに現在の富士宮口），須山(御殿場口)，須走と，山梨県側の吉田，河口（または川口，現存せず）があり，それぞれ浅間神社を中心に御師が居住する登山口集落となった（山村, 1994）。江戸末期の御師数で規模を比較すると，吉田と河口が他を大きく引き離しており，北麓を拠点とする登山が多くみられた。そこでは土地条件の悪さに基づいて農業以外の収入源が模索され，その一形態として御師が成長し，彼らの活動によって多くの信仰登山者がみられた（内藤, 2002）。

開国以後は観光目的地としての性格が徐々に強くなり，時期によって強弱はあるものの観光開発が本格化していった。まず，富士山麓では外国人が当初の観光化に大きな役割を果たした。インバウンド観光はすでに江戸末期にもみられ，1860 年 9 月にはイギリスの特命全権公使オールコックが富士山に外国人として初登頂した。その後は，信仰目的ではない，レクリエーションとしての登山が普及していく。また，日本にスキー技術を本格的に伝えた，オーストリア＝ハンガリー帝国軍人のレルヒ少佐は，同じオーストリア人で横浜在住の貿易商クラッツァーとともにスキーでの富士登山を試みた（中野, 1964）。彼らは 1911 年 4 月に御殿場口から登頂したが，山頂に達することはできなかった。時期は前後するが，1895 年には精進湖に外国人専用ホテルが設けられ，富士山に加えて富士五湖も観光資源として機能するようになった。1936 年に富士箱根国立公園に指定されると，その名声は世界に拡大した。

以上のようなインバウンド観光，後の日本人による観光による訪問者は，交通整備とも相まって増加していく。1889 年には，東海道線が現在の御殿場線経由で敷設され，同時に御殿場駅が設置された。一方北麓では，現在の中央本線が大月まで 1902 年に，甲府までは 1903 年に開通した。1929 年，富士山麓電気鉄道（現，富士急行線）が大月と富士吉田間で開通した。この当時，富士

山山麓では馬車鉄道網が整備され，御殿場と大月間を結んでいた（内藤, 2002）。

2）高度経済成長期～リゾート開発期

富士山や富士五湖をはじめとする自然景観資源は，それだけで多くの観光者をひきつける潜在力を有してきた。しかし，より多くの来訪者を目指して，さまざまな施設やサービスが付加されてきた。すなわち，観光開発が盛んになり，とくに高度経済成長期における開発が顕著であった。まず，富士スバルラインをはじめとするインフラ，さらには別荘地やゴルフ場，遊園地などが開発・整備された。別荘地開発は1930年前後にすでに開始されたが，北麓を中心に進行した。これは北麓一帯が広範囲にわたって山梨県有地で占められており，この公有地において大規模な別荘地開発がなされたためである（山村, 1994）。その傾向は高度経済成長期も続き，北麓での別荘地開発が目立っており，逆に南西麓では開発はほとんどみられない。別荘地と並んで，富士北麓，とくに山中湖畔では宿泊施設の一形態として多くの保養所が展開してきた。あわせて，そこではテニスなどのスポーツ合宿地としての大きな発展がみられた（佐々木, 1988）。

同時に北麓では，富士五湖国際スケートセンターが1961年に開園し，1964年には富士急ハイランドへと改称され，その後規模を拡大させている。同じ遊園地としては，御殿場に小田急御殿場ファミリーランドが1974年に開設された。この遊園地は1999年閉園したが，翌年にはアウトレットモールの「御殿場プレミアム・アウトレット」へと利用変更された。一方，ゴルフ場は東麓に集中する傾向が強い。これは，東京からアクセスのよい東名自動車道沿線であることによるものである。そのほか，スキー場や水上レクリエーション施設・サービスなどの開発も進んだ。上記のような施設開発はバブル経済期においてもみられた。ただし，これらの観光開発は，土地所有や利用形態などによって，富士山麓内で地域的に不均等になされたことに特徴がある。

日本人の観光行動パターンは，外国人，とくに欧米人のそれと比べると，一般に旅行あたりの時間が短いことや周遊観光が卓越することに特徴づけられる。周遊観光の伝統は江戸時代以来との指摘もあるが（太田, 2013），富士山における多様な観光資源の存在，さらにはその複合性が周遊旅行を好む観光者をひきつけてきた。たとえば富士五湖の湖畔では，保養のほかに，ブラックバス釣り，スポーツ合宿などの複合的な観光形態がみられ，さまざまな観光者が来訪している。富士スバルライン沿道や富士五湖などの自然景観に加え，上述の遊園地，また博物館，温泉などの多様な観光資源の存在は，富士山麓での観光周遊性を成立させている。

以上のような富士山をめぐる観光には地域差が生じてきた。すなわち，北麓と東麓では観光開発が進み，関連施設の整備が進んでいった。それに対して南麓と西麓では観光開発の程度は小さくなっている。この地域差には交通条件や政策が作用してきたと考えられる。

3）バブル経済崩壊以降

バブル経済崩壊後の日本では，経済不況に基づいて観光産業全体も停滞傾向にある。しかし，富士山はそのなかにあっても，大都市圏からの近接性に恵まれることや，別格であるという性格に基づいて多くの観光者をひきつけてきた。もちろん2000年以降は，さまざまな変化が生じている。たとえば，第二次世界大戦後はあまり強調されなかったインバウンド観光が大きく発展している。さらには，登山ブーム，世界遺産化，さらには一般的にみられる観光行動の多様化の影響も色濃く存在する。

2000年以降，とくに2010年前後以降にみられるインバウンド観光の発展において，富士山は重要な観光対象として認識されている。江戸末期以降，外国人にとって富士山は日本のシンボルとして認識されてきたであろう。さらには訪日中国人旅行者には，東京と大阪間をバスで周遊しながら移動する行動パターンが卓越し，そこでは富士山鑑賞が重要な地位を占めている（金, 2009）。富士山をめぐる世界遺産化は，富士山の知名度をより高め，イメージを向上させていると推察される。吉田口5合目における外国人立ち寄り者の

多さは，知名度の高まりを反映していると考えられる。

富士山への登山は，登山ブームにも後押しされて継続して人気が維持されている。登山の期間が制限されている（7月から9月上旬）ために，短期間に登山者が集中する。さらに，4つの登山口（吉田，御殿場，須走，富士宮）で年間30万人の登山者がいるが，そのうち約60％が吉田口を利用している。登山口へのアプローチの良し悪しが，登山ルート集中をもたらす大きな理由であろう。山小屋利用の適正化や登山道の持続的な利用も含めた，利用と環境とのバランス維持が今後の課題である。

一方で，富士山をめぐる観光行動の多様化が進みつつある。そのなかで，エコツーリズムやジオツーリズム，ルーラル・ツーリズムについては，政策の後押しもあって，それらの成長が期待されている。富士山やその周囲に存在する多様な自然環境に基づいた，エコツーリズムやジオツーリズムはますます注目されるであろう。広大な樹海，さまざまな植生はエコツーリズムの格好の対象であるし，火山地形や湖沼，湧水群，胎内樹型などに基づくジオツーリズムも注目される。富士山麓に展開する農業地域では，ルーラル・ツーリズムの展開がみられ，東京からの優れた近接性により多くの農産物直売所や観光農園の立地を可能としている。さらには，富士宮やきそば，吉田うどん，ほうとうなどを対象としたフード・ツーリズムも重要性を増している。一方で，世界文化遺産の重要な柱である，富士講をめぐる文化観光の強調が小さいことは今後の課題となろう。

このように，東京からのアクセスのよさに基づいて，富士山はマスツーリズム型の目的地として発展してきた。北麓と東麓への来訪者の集中，さらには特定の目的地への集中は依然としてみられるものの，観光行動の多様化によって目的地が分散する傾向も観察される。それゆえ，観光空間としての富士山の広がりのなかで，観光行動に変化が生じている。その契機として重要な地位にあるのは，外国人の増加であり，また世界遺産化であろう。外国人による日本での移動は公共交通機関に依存する傾向が強いため，北麓と東麓への来訪者の集中が依然として目立っている。

しかし，世界遺産化した富士山の観光をめぐる，直近の大きな課題は，世界遺産委員会の勧告にどのように対応するかである（野口, 2014）。今後は，世界遺産と観光の関係を探る上で，とくに観光資源の保全と観光利用の推進のバランスを考える上で，富士山は格好の考察対象となるに違いない。

III. 特集号の概要

上述のように，富士山をめぐるもっとも古いタイプの観光は富士講によるものである。松井・卯田（2015）は，富士山のもつ聖性，聖なる山として富士登拝の旅をする民衆，その旅を企画・手配する御師（宗教者）に注目しつつ，近世期の富士信仰における登拝と観光とのかかわりを考察した。近世期には富士講が成立し，組織内で代参する形態がみられた。江戸からは往復で7泊8日の行程で，御師が手配を行った。この旅行は富士登山が主目的であったものの，他の霊山とあわせての参詣旅行も多くみられた。御師集落は登拝者に宿泊や富士登拝にかかわるサービスを提供する機能を有していたが，そのなかでも大規模な集落であった上吉田では，短冊形地割に景観的特徴があり，往時には100を超える御師住宅が建ち並んだ。富士山は，江戸市民にとって遠隔地に位置しながらも望見可能な存在であったが，親しみのある山であると同時に，登山に対する強い憧れと期待，達成感の大きさから特別な意味をもつ山として受容され，信仰の旅が再生産されていたことを明らかにした。

中西（2015）は，日本において絵画に表現された富士山について整理するとともに，表現内容の変遷について検討した。日本絵画と富士登山案内図に関しては，従来の研究成果の紹介を行うとともに簡略な解説を加え，大正期以降の鳥瞰図（パノラマ地図）に関してはオリジナルなデータを提示した。検討対象は，第二次世界大戦以前までのものに限定されているが，登山案内図やパノラマ地図を「絵画」に含まれるものとしてとらえ，

絵画に表現された富士山を総合的に整理したはじめての研究と位置づけられる。中世には，富士山は噴火する山，おそろしく高い山，神々の住む近寄りがたい存在として描かれていた。しかし，近世になると，画家が目にしたもの，実際に登山した経験を反映したものとして表現され，純粋な富士山画が卓越するようになった。登山案内図は，近世・近代を通じて，登山ルートや御師集落などを含み，山岳信仰の対象として登頂する山として表現されていた。一方，大正期以降にはパノラマ地図が多くみられるようになり，そこでは富士山が鉄道や自動車を用いた周遊観光という近代的観光の対象として表現されていた。このような富士山を描いた絵画における表現内容の変遷は，富士山が信仰の山から観光の山へと変貌していったことを反映している。

富士山をめぐるイメージも重要な研究視点である。尾藤（2015）は，富士山麓の住民が自らの生活と深く関わってきた富士山を，どのようなまなざしで眺めているのかに注目した。富士山へのまなざしについて，環境の側面から富士北麓と他地域の住民とを比較するとともに，富士北麓住民が富士山と関わって大切にしたいと考えている景観の枠組みを解明した。その結果，富士北麓とそれ以外の地域とで比較すると，富士山をよく眺めることができる地域の住民と，富士山が見えない地域の住民との間には，富士山の環境価値の評価に大きな差が生じている。富士山の環境価値をとくに高く評価している富士北麓の市町村の景観計画の内容を検討すると，どこからも眺められる遠景としての富士山の眺望に，独自の優れた近景の要素を組み合わせた，良好な景観の創出を意図していた。富士河口湖町の例では，富士山と湖が同時に眺められ，また近景に湖面と特定の植栽などの自然景観が組み合わされた景観が，住民の意識のなかにある優れた景観であることが示された。しかし，地域住民の環境・景観意識の枠組みが観光客のまなざしとは必ずしも一致しない点は，今後の観光振興計画の課題となるであろう。

それに対して，田中・畠山（2015）は，富士山観に注目した。景観認識からみた日本人の富士山観の変遷を把握するとともに，世界文化遺産登録後の富士山観の特性を解明した。まず，首都住民の富士山観がどのように変遷してきたのかを追究した。都の立地や人びとが富士山を目にする機会によって富士山観が編成され，江戸に都が移ると象徴としての富士山の性格が強まった。江戸からの文化発信が盛んになるにつれて富士山観が伝播した。近代以降は登山の一般化や宗教的重要性の減少がみられたものの，富士山の象徴性は維持された。現在も，日本人の根底にある自然観や文化観が反映された，美しさ，雄大さ，象徴性，ご来光にみられる宗教観などは継続して存在している。しかし，世界遺産登録前後のマスコミ報道等によって大量のゴミ等の否定的なイメージが生まれ，これらは新たな富士山観として認識される。一方で，マスコミによる情報発信の増加は，富士山とは馴染みのない国民に対して情報を補完し，国民全体としての統一した富士山観が形成される要因となった。

富士山麓の開発のなかで別荘地は重要な地位を占める。また全国スケールでみても，富士山麓は別荘地の集積が目立つ地域でもある。佐藤・渋谷（2015）は，別荘地開発の拡大プロセスと，別荘の利用形態について明らかにしている。明治期には外国人による避暑利用が卓越していたが，明治末期から日本人別荘が山中湖畔と河口湖畔に建てられるようになった。昭和初期には山中湖畔で本格的な別荘地が開始された。1960 年代初頭に別荘地開発は山中湖北岸と河口湖畔の富士桜高原に飛び火し，さらに高速自動車道路整備がなされると，1970 年前後の時期に大手資本による広大な別荘地開発が河口湖畔から十里木高原，富士ヶ嶺高原，朝霧高原で展開した。富士山麓の別荘地では週末滞在もみられるが，夏休みを中心に 7 月中旬から 9 月中旬にかけての避暑滞在が卓越している。とくに時間に余裕のある退職者や嘱託勤務者は夏季を通して別荘に滞在している。

企業等による保養所が多く集積することは，別荘地集積と並んで富士山麓の特徴である。渡邊（2015）は，山中湖畔の保養所集積地区の変化に注目した。保養所は日本独特の施設・サービスで

企業等による「直営寮」が一般的であるが，山中湖村では「貸寮」と呼ばれる独特な所有形態の保養所も存在し，両者は別個の地区に立地していた。貸寮は，企業等との契約に基づいて住民が独自に経営する形態である。かつてこれらの保養所は重要な宿泊拠点であったが，1990 年代後半以降は国民の観光行動の変化，企業による社員福祉サービス形態の変化などによって保養所利用者数が激減し，同時に施設数も減少の一途を辿っている。そうした傾向下，貸寮の場合，その閉鎖後は経営世帯がそのまま建物に居住し続けている例が大半であり，一部の世帯は新たに民宿経営を開始している。一方，直営寮では，閉鎖後は建物の多くが未利用のままとなっている。保養所はかつて山中湖村で観光産業の重要な役割を演じていたが，今後はその未利用資源を活かしつつ，持続的な観光発展への取り組みが求められている。

富士山が世界文化遺産に認定されたことの意味と課題を，鈴木（2015）は文化的景観との関わりの観点から論じている。富士山の世界遺産化，自然遺産から文化遺産へ変更プロセスが丁寧に説明される。富士山の世界遺産化は観光客の増加をもたらしている。外国人に注目すると，彼らは見どころが手頃にまとめられたパッケージツアーを活用し，手軽に世界遺産を味わっている。言葉の壁や時間的制約を背景に，いわば“安・近・短”旅行を消費しているのである。しかし，パッケージツアーに参加する外国人旅行者が，世界文化遺産のひとつの中核となっている富士信仰（富士講・富士浅間信仰の現状）に関わる構成資産に実地で触れる機会はほとんどなく，もっぱら添乗員の解説にのみ依拠しているのが実態である。こうした観光客に，限られた時間のなかでいかに世界文化遺産としての真正性を伝えていくのかを検討することは，世界遺産委員会から示された追加勧告に対応することと深く関係している。

杉本・小池（2015）は富士山麓という観光空間における観光者の行動の特徴を旅行距離の違いに注目して把握しようとした研究である。お盆時期に自家用車で来訪した道の駅利用者にアンケート調査を実施し，194 グループから得た観光行動空間に関する諸特性を分析した。富士山麓における観光者の中心は自家用を利用した国内個人旅行者であり，自然景観を楽しむことが富士山麓観光の共通の目的である。しかし，旅行距離によって観光行動や行動空間が異なっている。すなわち，富士山麓近隣地域居住者では日常的余暇活動を目的とした日帰り旅行が卓越する。一方，より遠距離に位置する地域から来訪した観光者では著名な観光スポットを巡る非日常的余暇活動が多くみられ，それらを周遊して宿泊する旅行形態をとっている。

観光目的地としての富士山に対するイメージは時代とともに変化しているが，有馬（2015）はその変化を検討した。分析資料は，観光スポットのイメージやその言説の変遷を追求する際に有効である旅行ガイドブックで，国内で代表的でまた毎年改訂されている『るるぶ富士山』を用いた。1995 年から 20 年間分について目次の見出しから頻出語句を整理し，類似する言説要素の観点で時期区分を行った。時期区分ごとの観光要素をより詳細に考察した。富士山の観光に関するイメージは富士登山に特徴づけられるが，それが本格化されたのは 2000 年代になってからであった。登山ブームの担い手として中高年に加えて若年女性が加わったことで，ガイドブックにおいて富士登山の内容が充実していった。しかし，近年では富士登山に関する情報の充実がみられるとともに，B 級グルメや聖地，世界遺産といった内容も付け加えられるようになった。

岡ほか（2015）は富士山にみられる移行帯の植生構造を把握し，さらにはその動態を解明した。具体的には，富士山北西斜面御庭付近のカラマツ低木林はどのように形成され，どのような自然環境の下で成立しているのかを追究した。その結果，2,390 ～ 2,650 m の標高帯に低木林域（移行帯）が形成されていた。移行帯を構成するカラマツの樹高と樹齢の関係には，樹高の大きな個体は若齢，小さな個体は老齢であるという傾向があった。移行帯は，とくにその下部で遷移が進行しつつあるが，不安定な立地と風衝によって長期的に維持されていると推定された。こうした生態

的な特性をもつ移行帯が観察される御庭をはじめ，宝永山，大沢崩れなど富士山の成り立ちや景観形成を学ぶことのできるさまざまなサイトを有する御中道は，エコツーリズムの格好の適地である。御中道全体の修復は必要であろうが，エコツーリズムやジオツーリズムの推進を通じて，富士山のより深い理解につながることが期待される。

富士山麓の農業的土地利用も重要な研究テーマである。太田・菊地（2015）はその変化に注目した。農業的土地利用変化は富士山頂を中心としたセクター状に，さらには標高段階に応じて異なった性格がみられる。すなわち，南麓（駿河湾沿岸地域）では樹園地率の増加がみられ，茶栽培や果樹栽培の経営部門が成長している。一方，東麓と西麓は類似した特徴をもち，低位段階での野菜栽培，中位段階で水稲作が優勢である。ただし西麓では酪農の存在が特異である。北麓はこれらの地区とは異なった性格をもつ。それは，観光者の訪問に基づいて農業が性格付けられていることである。米麦栽培と養蚕を組み合わせる伝統的な小農複合経営から，観光農園や農産物直売所の経営，もしくは宿泊施設で消費される野菜栽培が卓越するようになっている。これらの内部差は，土壌や地形などの土地条件と，都市化や観光化の進展の違いを反映したものと説明される。とくに，東京からの近接性に基づいたルーラル・ツーリズムの展開は富士山麓における農業の性格を規定する大きな要因であろう。

謝　辞

本研究の一部は，JSPS 科研費 15H03274 の助成を受けたものである。

文　献

有馬貴之（2015）: 旅行ガイドブックにみる富士山観光のイメージ変化―『るるぶ富士山』の目次を対象としたテキスト分析―．地学雑誌，**124**，1033-1045．［Arima, T.（2015）: Changing image of the Mt. Fuji region as a tourism destination: Content analysis of the *Rurubu Mt. Fuji* guidebook series. *Journal of Geography*（*Chigaku Zasshi*）, **124**, 1033-1045.（in Japanese with English abstract）］

浅黄谷剛寛（1972）: 農業および畜産の変容．青野壽郎・尾留川正平編：日本地誌第 11 巻　長野県・山梨県・静岡県．二宮書店，574-578．［Asagiya, T.（1972）: Changes in farming and stock raising. in *Geography of Japan 11: Nagano, Yamanashi, and Shizuoka*（*Nihon Chishi 11 Nagano-ken Yamanashi-ken Shizuoka-ken*）edited by Aono, H. and Birukawa, S., Ninomiya Publishing, 574-578.（in Japanese）*］

尾藤章雄（2015）: 富士山をめぐる北麓地域住民の環境・景観意識．地学雑誌，**124**，937-951．［Bito, A.（2015）: Public consciousness of local residents living in the northern Mt. Fuji Area towards environments and landscapes. *Journal of Geography*（*Chigaku Zasshi*）, **124**, 937-951.（in Japanese with English abstract）］

金　玉実（2009）: 日本における中国人旅行者行動の空間的特徴．地理学評論，**82**，332-345．［Jin, Y.（2009）: Spatial characteristics of Chinese tourist activities in Japan. *Geographical Review of Japan*, **82A**, 332–345.（in Japanese with English abstract）］

丸山浩明（1994）: 火山山麓の土地利用．大明堂．［Maruyama, H.（1994）: *Land Use on the Volcanic Slopes*（*Kazan Sanroku No Tochi Riyo*）. Taimeido.（in Japanese）*］

松井圭介・卯田卓矢（2015）: 近世期における富士山信仰とツーリズム．地学雑誌, **124**, 895-915．［Matsui, K. and Uda, T.（2015）: Tourism and religion in the Mount Fuji area in the pre-modern era. *Journal of Geography*（*Chigaku Zasshi*）, **124**, 895-915.（in Japanese with English abstract）］

内藤嘉昭（2002）: 富士北麓観光開発史研究．学文社．［Naito, Y.（2002）: *A Historical Study of Tourism Development in the Northern Slope of Mt. Fuji*（*Fuji Hokuroku Kanko Kaihatsu Shi Kenkyu*）. Gakubunsha.（in Japanese）*］

中西僚太郎（2015）: 絵画に表現された富士山．地学雑誌，**124**，917-936．［Nakanishi, R.（2015）: Mt. Fuji in pictures. *Journal of Geography*（*Chigaku Zasshi*）, **124**, 917-936.（in Japanese with English abstract）］

中野　理（1964）: スキーの誕生．金剛出版．［Nakano, O.（1964）: *The Birth of Japanese Skiing*. Kongo Shuppan.（in Japanese with English abstract）］

野口　健（2014）: 世界遺産にされて富士山は泣いている．PHP 研究所．［Noguchi, K.（2014）: *Mount Fuji is Crying, Being Made a World Heritage Site*（*Sekai Isan Ni Sarete Fujisan Wa Naiteiru*）. PHP Kenkyujo.（in Japanese）*］

大垣久雄（2000）: 山麓は豊かな農牧業地域．静岡地理教育研究会編：富士山　世界遺産への道．古今書院，29-48．［Ogaki, H.（2000）: The foot of Mt. Fuji is a rich farming area. in *Mt. Fuji: The Way to the World Heritage Site*（*Fujisan: Sekai Isan Eno Michi*）edited by Study Group of Geography Education in Shizuoka（Shizuka Chiri Kyoiku Kenkyukai）, Kokon Shoin, 29-48.（in Japanese）*］

岡　秀一・白川亜沙子・菅野洋光（2015）: 富士山北西

斜面御庭付近のカラマツ低木林はなぜ維持されるのだろうか？―御中道巡りの魅力の再認識のために―. 地学雑誌, **124**, 1047–1060. ［Oka, S., Shirakawa, A. and Kanno, H. (2015): Why does a larch scrub community establish around oniwa on the northwestern slope of Mount Fuji?: Experiencing the fascination again of a tour of the *Ochu-do* trail. *Journal of Geography* (*Chigaku Zasshi*), **124**, 1047–1060. (in Japanese with English abstract)］

太田　勇（1972）: 新興工業の発展. 青野壽郎・尾留川正平編：日本地誌第 11 巻　長野県・山梨県・静岡県. 二宮書店, 570–574. ［Ota, I. (1972): Development of the new industry. in *Geography of Japan 11: Nagano, Yamanashi, and Shizuoka* (*Nihon Chishi 11 Nagano-ken Yamanashi-ken Shizuoka-ken*) edited by Aono, H. and Birukawa, S., Ninomiya Publishing, 570–574. (in Japanese)*］

太田　慧・菊地俊夫（2015）: 富士山周辺地域における農業的土地利用変化とその地域性. 地学雑誌, **124**, 1061–1084. ［Ota, K. and Kikuchi, T. (2015): Changes in agricultural land use at the foot of Mt. Fuji and regional characteristics. *Journal of Geography* (*Chigaku Zasshi*), **124**, 1061–1084. (in Japanese with English abstract)］

太田　孝（2013）: 昭和戦前期における伊勢参宮修学旅行の研究. 人文地理, **65**, 283–301. ［Ota, T. (2013): A study of school trips to the Ise Jingu Shrine during prewar Showa era. *Japanese Journal of Human Geography*, **65**, 283–301. (in Japanese with English abstract)］

佐々木　博（1988）: 観光地山中湖村の地域形成. 筑波大学地域研究, **6**, 95–134. ［Sasaki, H. (1988): Formation of tourist resort in Yamanakako-mura at the foot of Mt. Fuji, Japan. *Area Studies Tsukuba*, **6**, 95–134. (in Japanese with English abstract)］

佐藤大祐・澁谷和樹（2015）: 富士山麓における別荘地の開発と利用形態. 地学雑誌, **124**, 965–977. ［Sato, D. and Shibuya, K. (2015): Development and usage patterns of second-home areas at the foot of Mt. Fuji. *Journal of Geography* (*Chigaku Zasshi*), **124**, 965–977. (in Japanese with English abstract)］

杉本興運・小池拓矢（2015）: 富士山麓における観光行動の特徴―着地からの旅行距離に着目して―. 地学雑誌, **124**, 1015–1031. ［Sugimoto, K. and Koike, T. (2015): Tourist behaviors in the region at the foot of Mt. Fuji: An analysis focusing on the effect of travel distance. *Journal of Geography* (*Chigaku Zasshi*), **124**, 1015–1031. (in Japanese with English abstract)］

鈴木晃志郎（2015）: ユネスコの追加勧告にみる富士山の世界文化遺産としての課題. 地学雑誌, **124**, 995–1014. ［Suzuki, K. (2015): Understanding recommendations to be implemented for the better management of Mt. Fuji as a World Cultural Heritage. *Journal of Geography* (*Chigaku Zasshi*), **124**, 995–1014. (in Japanese with English abstract)］

田中絵里子・畠山輝雄（2015）: 日本人の富士山観の変遷と現代の富士山観. 地学雑誌, **124**, 953–963. ［Tanaka, E. and Hatakeyama, T. (2015): The evolution of Japanese perceptions of Mount Fuji and modern perceptions of Mount Fuji. *Journal of Geography* (*Chigaku Zasshi*), **124**, 953–963. (in Japanese with English abstract)］

辻本芳郎（1972）: 郡内機業とその変容. 青野壽郎・尾留川正平編：日本地誌第 11 巻　長野県・山梨県・静岡県. 二宮書店, 337–342. ［Tsujimoto, Y. (1972): Changing silk industry in Gunnai region. in *Geography of Japan 11: Nagano, Yamanashi, and Shizuoka* (*Nihon Chishi 11 Nagano-ken Yamanashi-ken Shizuoka-ken*) edited by Aono, H. and Birukawa, S., Ninomiya Publishing, 337–342. (in Japanese)*］

渡邊瑛季（2015）: 山梨県山中湖村における保養所の特質とその変容. 地学雑誌, **124**, 979–993. ［Watanabe, E. (2015): Changing characteristics of *Hoyo-jo* in Yamanakako Village, Yamanashi Prefecture. *Journal of Geography* (*Chigaku Zasshi*), **124**, 979–993. (in Japanese with English abstract)］

山村順次（1994）: 観光地の形成過程と機能. お茶の水書房. ［Yamamura, J. (1994): *Development Process and Functions of Tourism Destinations* (*Kankochi No Keisei Katei To Kino*). Ochanomizu Shobo. (in Japanese)*］

湯澤規子（2009）: 郡内地域. 斎藤　功・石井英也・岩田修二編：日本の地誌 6：首都圏 II. 朝倉書店, 471–481. ［Yuzawa, N. (2009): Gunnai region. in *Geography of Japan 6: Tokyo Metropolitan Area II* (*Nihon No Chishi 6 Shuto Ken II*) edited by Saito, I., Ishii, H. and Iwata, S., Asakura Publishing, 471–481. (in Japanese)*］

* Title etc. translated by M.K.